最新鋭スキー技法の具現者たち

栄冠を求めて

連載第6回――――文・写真／志賀仁郎

新しいスキー技法は、どこから生まれてくるのか。
これまで時代の変遷とともに、スキーのスタイルは、次々と磨き出されてきた。
トップレーサーのすべりの分析から抽出された技法が、指導理論に結びつき、
一般のスキーヤーに普及していく道筋に、もう一度注目してみよう。
そこから、スキーの新しい視点が生まれ、君自身の技術向上のヒントが見つかる。

これまで、世界のスキー技法の流れと日本人の求めてきたスキーについて、主としてそこにある落差についてレポートしてきた。それはスキーというスポーツにおける比較文化論とでも言えるはずのものである。

その締めくくりとして、野沢温泉でのインタースキーに向けて準備が進められている現在、日本は、どんなすべり、どんな技法を求めているのか。あるいは求めなければならないのかを考えてみたい。

この連載について「トップレーサーの技法と技術選の技法を比較しても意味がない」と言う人が今なおいるという報告を何人かの友人たちから聞いた。

競技のスキーと一般スキーとは、まったく違う世界だとする考え方が日本のスキー界には長い間存在していた。そしてその考え方は日本のスキーを特異なものとする原因にもなっているのである。

トップレーサーと一般のスキー技術

ヨーロッパでも、競技のスキーとレクリエーションスキーヤーの落差の問題はかなり長い間、激しい論争を生んできているのである。

1951年、インタースキーの第1回の会議がオーストリアのツールスで行なわれた。その時が、世界中のレクリエーションスキーヤーたちの技法についての論争の幕開けと言っていい。

それ以前には、スキー技法に関する情報は競技の世界にいる人々の技法の優劣を論ずるもの、また名手と呼ばれる、わずかな人々の技術的な特徴を伝えるといったものに限られていた。

ハンネス・シュナイダーのアールベルグ技法、草創期の名手アントン・ゼーロスのテンポシュブング、そして、そのゼーロスの技法を伝授されたフランスのエミール・アレーが提唱したフレンチメソッドが、その中で際だったものと言えたろう。

だれがどうすべっているのか、が伝えられ、どこに名手がいるかが話題になっていた。

日本にも同じような状況があった。30年にハンネス・シュナイダーが来日して、日本に第1次スキーブームと呼ばれる時代が訪れたのだが、その時から第2次世界大戦をはさみ、60年に至る時代は、各地に散在する名手の元にスキーファンたちが集まり、一家を形成するといった風景があった。小樽、札幌、妙高、菅平、白馬といった拠点には、スキーの神様、スキーの天才と呼ばれる人がいて、そこに誰誰派といった流派があった。それは剣豪が群雄割拠した状況と似ていたのである。

そうした状況は、第1回のインタースキー開催によって、様変わりすることになった。

オーストリアかフランスかの論争に代表される、雪のある国々の主張が生まれ、スキーを習いにくるレクリエーションスキーヤーにどうスキーを教えるか、が論争の軸になってきた。

そのインタースキー以後のスキー技法の発想と、指導理論への消化といった作業は、どう進められたであろうか。

38年に発表されたエミール・アレーのフレンチメソッドは 世界中の人気を獲得した。それは、オーストリアのアルペンレースの名手、アントン・ゼーロスを迎えての特訓によって、力をつけ、アルペンレーサーとして世界のトップにたったアレーが、ゼーロスの教えたテンポシュブングを彼なりに解釈し、彼自身が演じた写真によって見事な教科書を作り上げたものだった。

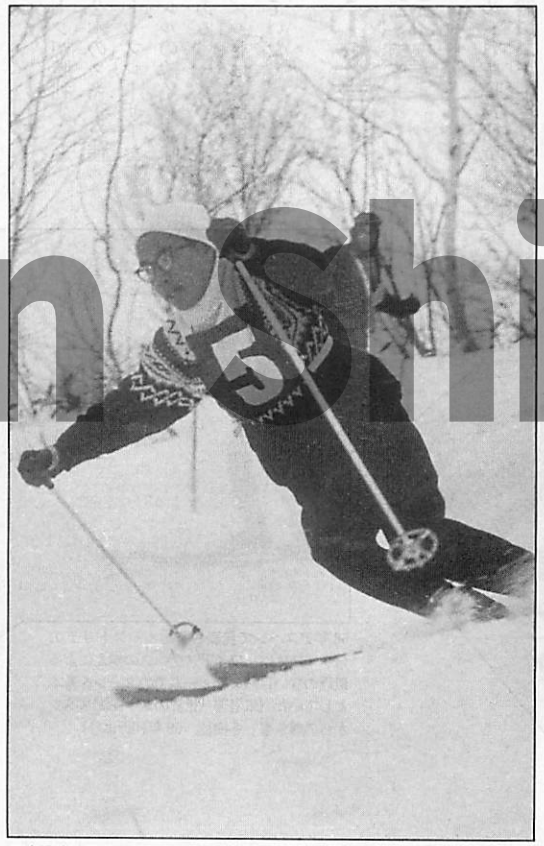
世界チャンピオン、エミールの技術、それがフレンチメソッドだった。「競走に勝つこと」がその技法の優位を証明することになったのである。

第1回インタースキーでは、そのフレンチメソッドが、オーストリアのツールスの雪の上で誇らしげに披露されている。

オーストリアは、そのフレンチメソッドを打倒するために、世界大戦後のアルペン競技で活躍していたオーストリアの名手たちの技法を分析することによって、フランスの主張と対立する新しい技術体系を探っていた。クルッケンハウザー教授の研究は、その当時の世界のエースたちの1秒を争うなかに自然に現れた技法の中から、新しい技術要素を探り出して、新しいオーストリア技法として体系づけた。

ウエーデルンは、そうした作業の中から生み出された技法であった。

当時スラロームで世界中から注目された東



天才児猪谷千春の技法は、幼児期からの、奔放で徹底的なスキー体験に鍛え上げられたものであった。1959年志賀高原での現役最後のすべり

Zinshiga

洋のネコ猪谷千春の技法がもっとも強く、クルッケンハウザー教授の心を捉らえていたと伝えられている。

ウエーデルンは、日本人猪谷の技法から発想されたとも言えるのである。

そのオーストリアスキーメソッドが発表された時、そして、フランス・オーストリア2大スキー国による激しい技術論争が生まれた時、アルペン競技の創設者、スキー界の巨人と呼ばれたイギリスの貴族、サー・アーノルド・ランは、その論争に嫌気がさしたのだろう。「ここでトップレーサーたち、スーパースキーヤーたちの技術がどうのこうのと論ずることは意味がない。一般のスキーを習いにくるファンたちは、どうすればうまくすべるようになるかを知りたがっているのだ」と嘆いてみせた。

ウエーデルン、ライナーシュブングといったオーストリアの主張、それを演じてみせる名手たち、それは現実からかけ離れた雲の上の話としか見えなかったのである。

しかし、トップレーサー、超上級者にしかできない技法と思わせたウエーデルンは、わずか5、6年を経た60年頃には、世界中のスキーファンの技法となっていた。

トップレーサーの技法が、オーストリア教程を介してレクリエーションスキーヤーのものになったのである。

オーストリアメソッドは、世界中のスキーヤーのバイブルになった。

60年代のスキー技法の進展とその経緯

ウエーデルンが世界中のスキーヤーの憧れの技術になった60年代は、世界中にスキーブームが巻き起こった時代であった。ヨーロッパ、アメリカでは巨大なスキー場開発のプランが進み、日本でも、スキー人口600万人という時代が到来していた。

その60年代は、オーストリアスキーの全盛期と言えたはずだが、それはまた、オーストリアスキー教程に対する批判の嵐が吹き荒れた時代であった。

シュテムクリスチャニアは、どんなにその開きを狭めても、どんなに両スキーを揃えるタイミングを早くしても、パラレルにはならない、というシュテムとパラレルのギャップの問題が、その批判の最大のテーマであった。つねにスキーをぴったりと揃え、一瞬もタイム差を置かずに同時に2本のスキーを操作する、それが完成されたパラレルターンなのだとするライナーシュブング、さらにウエーデルンの信仰がある限り、それは永遠のテーマに成り得たはずであった。

しかしながら、その60年代にアルペン競技は飛躍的な進歩を遂げていた。

同時操作のパラレルターンが勝利するということはない。スキーは2本のスキーを使ってすべるものだ。というトップレーサーたちの技法がシュテムとパラレルの論争を意味のないものにしていたのである。

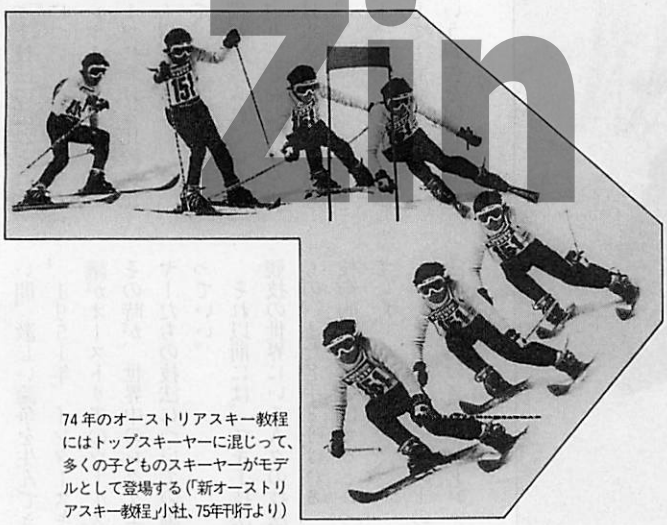
オーストリアスキーメソッドは、10年にして修正すべき状況を迎えていた。

子どものスキーに学ぶスキー技術の本質

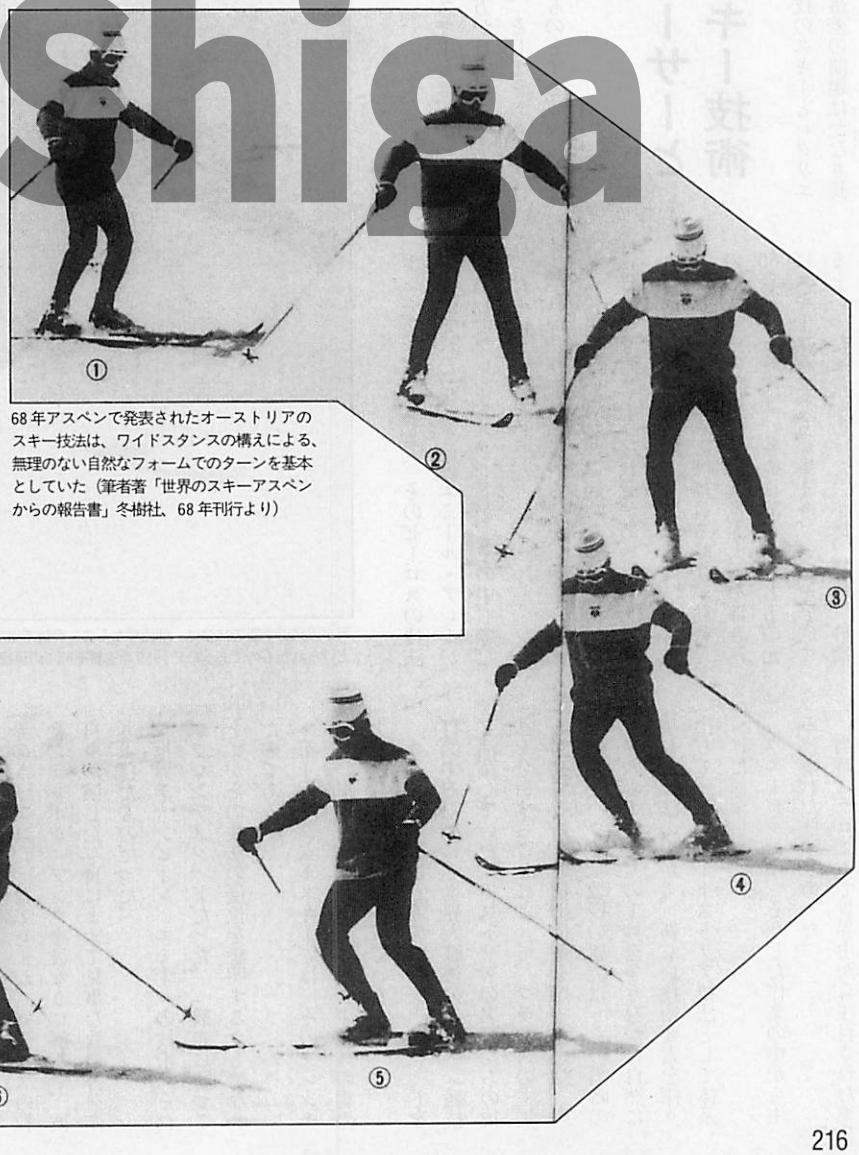
サン・クリストフで進められていた研究は、なにも教えられないで自然にスキーを覚えてしまう子どもたちのスキーを分析することに向けられていた。8年間に渡り、子どもたちの観察が続けられていたのだが、そこにスキー指導理論を根底から書き換える原理が発見されたのである。

「何も教わらないで自然にスキーを身につけた子どもたちは、トップレーサーと同じフォームですべっている」という事実があった。

68年、アメリカのアスペンで開かれた第8回インタースキーにオーストリアが発表した論文は、子どもたちが自然に身につけるスキー技法を分析し、その当時のトップレーサーの技法との共通項を探り出す作業から得られた、新しい提案であった。



74年のオーストリアスキー教程にはトップスキーヤーに混じって、多くの子どものスキーヤーがモデルとして登場する（「新オーストリアスキー教程」小社、75年刊行より）



68年アスペンで発表されたオーストリアのスキー技法は、ワイドスタンスの構えによる、無理のない自然なフォームでのターンを基本としていた（筆者著「世界のスキーアスペンからの報告書」冬樹社、68年刊行より）

74年に刊行されたスイススキー教程にも、各国のテクニックと同じワイドスタンスの要素が見られる

Zin Shiga

古いオーストリアスキーの提唱者クルッケンハウザー教授と、新しい視点からスキー技法を捉えたホピヒラー教授の、ふたりの研究者の共同論文の発表の夜、クルッケンハウザー教授は「10数年前、われわれが発表したバインシュピール技法は、長い間、世界中の人々に支持され、スキーの普及に大きな力となってきた。しかしながら、そのオーストリア技法、指導理論は根本的に書き直さなければならなくなった。その理由はスキーヤーの増加でスキーを取りまく環境の急激な変化であり、スキー用具の驚異的な進歩である」と語ってスキーのバイブルとさえ呼ばれていたオーストリアスキー教程の廃棄を宣言したのである。

クルッケンハウザー教授の話をついで新しいオーストリアの提案の説明に入ったホピヒラー教授の講演は、その当時のトップレーサーの技法を写真を使って見せ、さらにサン・クリストフの神童とよばれた子どもたちのすべりを写した写真を公開した。

「何も教えないで自然にまかせたスキーヤーたちは、この写真に見られる通りトップレーサーとほとんど同じフォームですべることがわかった。そこに共通するのは、両スキーを左右に開いたワイドスタンスの構えであり、中間姿勢と呼ばれる無理のない自然なフォームなのだ」

美しいけれど、ちょっと窮屈なフォームのオーストリアスキーのイメージはこのアスペンで消滅した。

次の日、デモ斜面で演じられた、オーストリアのデモンストレーションは、楽しいショウとなった。主役はサン・クリストフの天才児たちであった。トップレーサーの技法と子どもたちのやりかたを結び付ける作業が新しい時代のスキー技法探求の王道となった。

初心者はどこの国でも同じ、彼らは子どもが自然に覚えるやり方なら、この難しいスポーツに入り込みやすいのではないか。

それがスキー教師たちにとっての救いになっていた。

おとなの初心者は、それまでのオーストリア教程であったら、プルークボーゲンを習いシュテムボーゲンに仕上げるのに何シーズンかを要したはずだが。

ちょっとばかり不細工だが、短いスキーを使ってのグルンドシュブングなら、それほどの時間をかけずに習得できることになった。

スキー技法の革新時代

68年アスペン第8回から71年ガルミッシュパルテンキルヘン第9回までの数年間に世界中のスキー指導者は、古いオーストリアスキーの呪縛から逃れて、新しい指導法、技術体系の構成に情熱を傾けていた。

古いオーストリアスキーへの信仰が消え世界のスキーが大きな変化の流れに乗った70年代は、スキー技法の研究がもっとも激しい流れを作っていた時代であった。

70年の1月オーストリアが発表したヴェレンテクニック、同年のドイツのシュロイダーテクニック、71年スイスのOKテクニックといった沈み込み技法、今でいう吸収系のターンは、それぞれ独自に開発された技法であったが、どれも同じ様なフォームを取っていた。

その研究の基礎になっていたのは、60年代後半、アルペン競技のピステに進行していた前衛技法の分析だったのである。

66年、南米大陸ポルティヨで開かれたアルペン世界選手権大会に圧勝したフランスチームのエースたちが注目され、ジャン・クロード・キリーの特異なフォームが分析されていた。そのすべりかたは、キリー自身が言うように、故郷バルディゼールの急斜面の深いコブをすべるうちに身につけた技法であった。

「だれに教えてもらったわけではない。子どもの頃から近所の子たちと一緒にすべっているうちに自然に今のすべりかたができるようになっていたんだ」と語った、その子どもの時のすべりにトップレーサー、キリーの秘密があった。

そのキリーの技法、さらにキリーのすぐ後

Zin Shiga

サン・クリストフのゲレンデをすべる、トップデモ、ミッシェル・フルトナーとエディ・ハウワイスの娘

74年に刊行されたドイツのスキー教程には、子どもたちのすべりが随所に紹介され、スキーの運動要素を示す見本になっている

74年、ドイツのスキー教程の表紙には、楽しそうにすべる子どもたちの写真が使われている

に続いたスラロームの鬼才パトリック・リュッセルのキリーよりも更に奇妙なフォームですべる技法が、ピステに猛威をふるうことになって、フランス人の特異な技術は多くの研究者たちの研究対象になっていた。

フランスのスキー技法の研究家ジョルジュ・ジュベールの研究が注目された。

その研究は50年代の後半から、グルノーブル大学スキークラブを中心に進められてグルノーブル学派と呼ばれていた。66年のポルティヨの後に発表された論文の中にジェット・ビラージュと呼ぶ高速ターンの方法や、アバルマンと呼ばれる急斜面テクニックが紹介されていて、その論文に注目が集まっていた。

ヴェレンテクニック、シュロイダーテクニック、OKテクニック、そして日本の曲進系技法は、そのどれもがジュベールの主張したアバルマンと共通する技法と言えたのである。

71年、ドイツのガルミッシュパルテンキルヘンで開かれた第9回インタースキーは、前衛技法の発表会となっていた。

スイスのカール・ガンマは、その前衛技法について「多くの国がそれぞれ自国の技法ととする前衛技法を発表したが、それはどれも同じで、ただその名前だけが違うという状況にある」と笑ったが、世界のスキー技法研究は、すべてその視点がアルペン競技のトップレーサーに向けられていた。

そして、その当時続々と発表された各国の指導理論、スキー教程は、そのほとんどが、子どもたちの自然に身につけた技法を基礎に構成され、その技法の中に、必ず吸収形（ベンディング系）の技術が掲載されている。

トップレーサーと子どもとを結ぶ線の中に初心者から上級者に導く道がある。

それが常識となった。

日本の、特異な技術分析の視点

日本にも極めて完成度の高い吸収形のターン、曲進系技法が生まれていたことは、前回までに報告したのだが、日本のその理論、そして、技法の完成にはヨーロッパとはかなり異なった方法と事情があった。

それは、研究の過程の中にまったく、トップレーサーの技法の分析、子どものスキーの観察といった視点がなかったことである。

技術分析の作業は、第4回デモ選のスーパースター、パンチョこと佐藤勝俊の悪雪のすべり、深雪の技法の分析から開始され、ヴェレンテクニック発表の情報をもとにしてのその当時のトップデモ、藤本進、平川仁彦、関健太郎らの前衛技法への試技が積みかさねられた結果、SAJ教育部の首脳たちの頭の中で生み出され、組み立てられていたのである。

世界各国での研究の方式とはまったく異なる発想、異なる経過がそこにある。

さらに新しい技法を求めるために

スキー技術に関する研究、さらにその技術をどう伝達するかの指導法の研究は、この10年間ほど、停滞しているかに見える。それは、68年アスペンから75年ビソケタトリの第10回インタースキーの間に進行した激しい技術開発の時代の後に訪れた静かな流れる時代にあると考えられる。

それは、オーストリアの子どものスキーの研究が探り当ててしまった、自然なスキーの本質、つまりスキー指導法を難しいものにすることはない、とにかく楽しくすべることさえ覚えてしまえば少々不格好でも、すべることによってそれは洗練され、見ていて美しいものに仕上がるのだという「学ぶより慣れよ」の原則が浸透してしまったことによる。

ヨーロッパの人々は、とにかくグルンドシュブングさえできれば、どこへでもすべりに行き、経験を積むことで上級者への道を求めるのである。

技術開発、指導理論の研究が停滞期に入った今、新たなスキー技法、より進んだスキー技法は、どこで生まれるのだろうか。

ヨーロッパでは、ワールドカップのピステに注目が集まっている。トンバの出現、オーモットら北欧勢の活躍によって、ワールドカップには再び観衆が集まる気配があると伝えられる。そしてテレビの視聴率にも回復の気配が見える。

なぜテレビでワールドカップを見るのかという疑問には「そこに私たちが求めるいいスキー、私たちがやってみたいいいすべりのお手本があるからよ」とドイツのおばさんたちが言う。「あんなトップレーサーのすべりにそんなものが見えるのか」と私がからかうと、彼女らは「レーサーのすべりはとてもシンプルでわかりやすい。私たちはスキー教師について、いろいろ難しいことを習ったけど、それはあんまり役に立っていないわ。でもワールドカップをじっと見ていると、あっそうだ、これだわと思えることがたくさんあるのよ」と答えた。

それこそがスキーというスポーツの本当の秘密だったはずである。

「うまいヤツを見ていればうまくなる」それは、何も教えないでも雪の上に放っておかれた子どもたちが、いつのまにかいいスキーを身につけていたという事実が証明している。

子どもたちは、自分たちの周辺にいるスキーヤーの中から一番うまいヤツのいいところだけを真似してすべる、とクルッケンハウザー教授が笑っていたのだが、私はそれこそ、スキー上達の最大の秘訣なのだと思う。

技術選、それは日本人のスキーを見る原点として存在するイベントである。

その技術選を見ることによって君たちのスキーは磨き上げられるはずである。

世界のトップレーサーを目指し、世界のトップの技法を吸収して、技術選に参加している日本のトップスキーヤーたち、彼等が見せる技法は、世界のトップテクニックを日本人のフィルターを通して見ることのできる、いい日本人のスキーなのだから。

（上）ワールドカップのトップレーサーであり、後にインタースキーのデモにもなったドイツのマックス・リーガーのスラロームの力強いすべり

（下）70年代当時から日本のデモンストレーターのすべりには、世界のトップレーサーの技法と共通する技術が多く見られる。写真は丸山隆文デモ

Yashica